

希望舞台プロジェクト

焼け跡から

西村滋 作「それぞれの富士」より

由井 敷 台本・演出

家族で富士山に登る約束だった…

美術 杜江 良
照明 高橋 康孝
音楽 余田 崇徳

振付け 松延 まさ子
宣伝美術 原 みちを
タイトル 篠原 鋭一

“孤児達は焼け跡で復員兵の和尚さんに出会った…”

昭和三十二年、学童疎開中、東京大空襲で家族を失った子供たちと荒寺を復興しようとする発起、新米和尚の物語。

文男(フー公)は今なお行方不明の両親は生きていると思ひ、戦争が終わったなら親子三人で富士山に登る約束を信じている。やるんなら勝つ戦争をやれ！と大人の始めた戦争をなじる達平(タツペ)は、防空壕の中で焼け死んだ両親と妹を自分の手で葬った。貞夫も、タタミで眠りたというミイ子も、その日の食べものとおねぐらを探す同じ孤児であった。寺の跡継ぎを拒否して軍隊に入った大善は、敗走し追われるままに満州の荒野をさまよい復員。お国のために、死ぬ時は一緒に誓った親友の勇敢な戦死を、帰国して知らされた。焼け跡の残骸が残る上野駅の裏側で野良犬のように追い回される孤児グループ「湯田中組」と出逢った大善。残飯を拾い集め、一つのリングをみんなで分け合って食べる孤児たちの姿につき動かされて、信州の自分の寺に来ないかと誘ってしまった。戦争は終わったが、新米和尚と孤児たちの生き

あらすじ



平井 愛子



安岡 和弘



米田 亘



森 ひとみ



藤田 尚希



高久 律子



杜江 良



西村 いづみ



井村 倫教



平岡 美保



溝畑 栄神



盛永 さくら



今村 優太

2017年 12月7日(木) 成田国際文化会館・大ホール 0476-23-1331・成田市土屋303

■18時00分開場 ■18時30分開演 (終演20時40分)

■一般前売 / 3,000円 ■高校生以下・障がい者手帳をお持ちの方 / 1,500円 (当日それぞれ500円増/全席自由)

主催 「焼け跡から」を観る会実行委員会

後援 成田市、成田市教育委員会、成田国際空港株式会社

お申し込み 0476-23-1774(高木)、090-2675-9262(篠原)、090-2779-5917(玉井)

「育ち合ひ」 子どものよるよるび



高木 正尊

(成田保育園園長)
(成田市・永興寺住職)

私は東京オリンピックピックを三年後に控えた昭和三十六年の生まれ。したがって戦争を体験していない者の一人である。

そんな私が学童の頃を思い出して。仕事で忙しい中、夕食の煮物を調理していた母が、「近所で一人暮らしのおばあちゃんの家」に

「ホントだあ！こんなにいっぱいどこで見つけたの？」ええとねえ、この葉っぱのところにいるんだよ。」

虫かごの中には七〜八匹のトンボ虫、葉っぱと土も少しずつ入れ

ただで食べて下さいと持って行って。そう言われて、渋々届けたことが何度かあった。また、近所のおばあさんが、「醤油が無いので、少し分けて下さい。」とわが家に来たこともあった。また、「あらあら、あなたの

この度の希望舞台「焼け跡から」公演は、人と人、すなわち人間を伝えてくれるもの、多くのみなさまにご覧いただければと願います。



昭和十九年生まれの私には「戦争体験」は無い。また山紫水明の農村地帯で育ったから「焼け跡」も知らない。けれど敗戦による経済苦は、山里の村にまで襲いかかり、どの家も貧しかった。田舎の小学校に給食など無く、誰もが弁当持参している。けれど、午前中の授業が終ると必ず幾人かは運動場の水飲み場に走った。弁当の無いものは水を腹を満たすしかない。私も...

交通アクセス



●電車をご利用のお客様

JR成田線「成田駅」または、京成電鉄「京成成田駅」下車。成田市コミュニティバスまたは千葉交通イオンモール直通バス、タクシーをご利用ください。

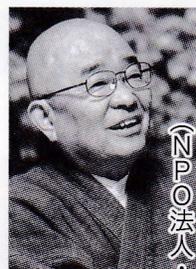
●お車をご利用のお客様

東関東自動車道 成田インターより5分 駐車可能台数 400台 (年末年始および特定日以外無料)

●バスをご利用のお客様

【成田市コミュニティバス】
「京成成田駅東口」または「成田市役所」より【所要約10分】
「文化会館」下車。
【千葉交通イオンモール成田行路線バス】
「京成成田駅」6番のりばより【所要約10分】
終点「イオン成田店」バス停下車、徒歩10分。

「山里にも 焼け跡から」の子がいた



篠原 鋭一

(NPO法人・自殺防止ネットワーク風理事長)
(成田市・長寿院住職)

昭和十九年生まれの私には「戦争体験」は無い。また山紫水明の農村地帯で育ったから「焼け跡」も知らない。けれど敗戦による経済苦は、山里の村にまで襲いかかり、どの家も貧しかった。田舎の小学校に給食など無く、誰もが弁当持参している。けれど、午前中の授業が終ると必ず幾人かは運動場の水飲み場に走った。弁当の無いものは水を腹を満たすしかない。私も...

図画工作の授業が始まると用務員のおばあちゃんが煮て下さった小麦粉が、小さく切られた新聞紙にひと匙ずつ分けられていく。ノリの代用である。それを見計らっていつもすばい動きを始めるのは常男ちゃんだ。みんなの机の上に乗っているノリのかたまりをひとさし指でチョッチョッチョツと嘗めてまわるのだ。けれど二クラス四十四人のクラスメイト誰一人、常男ちゃんを責めなかった。どこか遠い町に住んでいたが、家が家族も失い、おじさんにひきとられたという。けれどおじさんも戦地から引き揚げた傷病兵。極貧の生活を知っていたからである。実は常男ちゃんも「焼け跡から」やってきた一人だった...

正子ちゃんの行先を誰も知らない。大粒の涙を落しながら「見送りに来てもらって、おおきに(ありがとう)...と二声残して蒸気機関車が引く三等客車に乗った正子ちゃんにみんなが「さいなら」と手を振ったのは、列車が小さくなった頃の事。焼け跡から来た常男ちゃんも正子ちゃんもどこに行つたのだろうか？

希望舞台の新作は「戦争孤児はどのように生きたかを見つめること」がテーマであると聞いて、山里の村にも「焼け跡から」来たクラスメイトがいたことを伝えたいと思つた...

今、この新作はとても重要な舞台だと思えてならない。「焼け跡を見る目」が近づいているかも知れないと思うからである。

なつかしい仲間たち

山田 洋次

(映画監督)



くわくするほどの期待をしています。

「希望舞台」の仲間たちは、地を這うような苦労をして演劇活動を続けてきたグループです。この人たちこそ、西村滋さんのあの地獄の作品を劇化するのと同じように、胸がわ

苦しみを知っている人にだけ表現できる涙と笑いの世界を視覚化することが出来るのだ、と確信します。重苦しい舞台をつくるのはそんなに難しいことではありません。困り裏の火のように暖かくて、凍りついた心がゆつたりと解けていくような、そしていつか観客の表情が明るく頬笑むような、そんな楽しい舞台になることを心から願っています。